

令和七年春季号

現存の優品

日本刀



八十六番 耕冲



99

現存の優品 ⑨⑨

目次

脇差	無銘 末左（大左一門）（南北朝中期・筑前）	3
太刀	備州長船住景光／元徳三年三月日（鎌倉末期・備前）	4
槍	兼元（天文）美濃 室町後期	5
脇差	備州長船盛光／応永廿八年三月日（室町初期・備前）	6
短刀	正重（千子）（永正・伊勢）室町後期	7
短刀	備州長船祐定／永正八年二月日（室町後期・備前）	8
菊池槍	無銘 末延寿（切付銘）左右衛（室町後期・肥後）	9
脇差	大和太掾藤原正則（元和・越前）江戸初期	10
脇差	守勝（得次郎）（寛永・下野）江戸初期	11
大	陸奥大掾三善長道／延宝三乙卯年二月日（江戸前期・会津）	12
小	包吉（寛文）仙台 江戸前期	13
脇差	近江大掾藤原忠広（寛文・肥前）江戸前期	14
長巻	泰龍斎宗寛造之／文久二年八月日（幕末・江戸）	15
刀	造大慶直胤（花押）	16
刀	天保七年仲春 由虎好之（江戸・江戸後期）	18
刀	源正雄／文久三年三月日（幕末・江戸）	19
刀	慶応四戊辰年春二月（幕末・江戸）	20
刀	相州住和平作／昭和甲寅年初冬吉日（現代・神奈川県）	21
刀	信家 竹園 鉄鎧目地 桃山時代	22
刀	無銘 赤坂 三匹鈴虫透し図 江戸中期	23
小柄	宗珉（花押）虎溪三笑図 江戸中期	24
刀	無銘 京透し 八橋透し図 室町後期	25
刀	予州住 正阿弥家武 牡丹透し図 江戸中期	26
刀	八坂永閑 左右松透し唐草図 江戸中期	27
刀	無銘 古正阿弥 川筏に小禽図 桃山時代	28
刀	山城国住人 理忠重成 龍図 赤銅磨地 江戸中期	29
目貫	無銘 古美濃 蔓瓢透し図 金無垢地 室町時代	30
小柄	後藤法橋（棟銘）・一乗（花押）（戸尻銘）	31
小柄	流水につくばね草図 幕末	32
小柄	浜野直随（花押）（棟銘） 帆掛け人物図 江戸後期	33
小柄	行年六十一歳 如竹叟 月に時鳥図 銀磨地 江戸中期	34
小柄	光興（印銘・鼎印） 鶴図 江戸後期	35
鐔	茂包 柳樹二匹馬図 江戸中期	36

●価格は説明文の末尾にあります

表紙題字：「日本刀」 東大寺長老 故・清水公照師筆

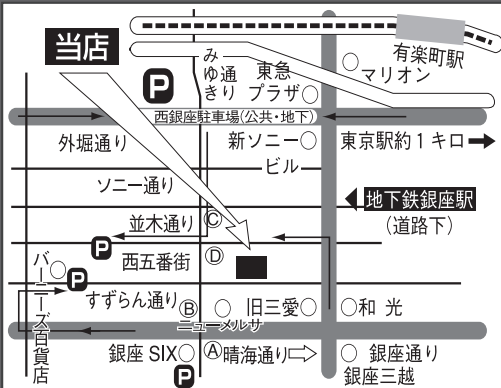
表紙：武具図 八十六翁耕沖（上田耕沖。幕末～明治。四条円山派）

銀座・刀剣柴田 春季即売会

令和7年(2025年)
4月4日(金) 5日(土)・7日(月)

●6日(日曜日)はお休みさせていただきます。

●当店への交通は
地下鉄銀座駅から徒歩1分、
JR有楽町駅から徒歩8分。
東京駅からでもタクシー15分、
基本料金で来ます。



【会期中の営業時間】 朝10時～夜6時

＊お車では、上記4カ所の駐車場が便利です

〒104-0061 東京都中央区銀座5-6-9 ☎ 03(3573)2801
ホームページ：http://www.tokensibata.co.jp FAX 03(3573)2804

ご送金のご案内

- ①三井住友銀行／銀座支店 普通預金 7038644 (株)刀剣柴田
(送金手数料、お引きください)
- ②郵便局／振替口座 00190-7-52891 刀剣柴田
(必要でしたら振替用紙、ご請求ください)

ご挨拶

やっと春が来ました。
今年の冬はきつく、日本海側の東北・北陸では雪が多く、東京もその影響で三度寒波がきて、寒い日を過ごしました。
しかし、刀剣・小道具の方では、東京で、またニューヨークで大きな個人収集家の売立てオークションがあり、また大野義光刀匠の初の即売個展が日本橋三越で行われるなど、けっこう活発な時期でした。
当方も春の即売会にむけ品物を集めました。春季カタログをお送りいたしましたので、どうぞご覧いただき、お問い合わせいただければ幸いです。
また、どうぞ銀座の店にもおいでください。まわりは外人さんがますます増えて、明るい活気は目をみはるほどです。

令和七年四月 柴田光隆

脇差 無銘 末左すえさ（大左おおさ一門）

（南北朝中期—筑前）約六五〇年前

菟浦造り 刃長一尺六寸一分（48・7cm） 反り三分強 元巾九分二厘 先巾八分 重ね二分四厘

長さ頃合いに、反り浅めに先反りつき、鎗高く棟を強く卸してスラリとした姿の薙刀直しの脇差。地鉄、板目肌立ちこころで流れを交え、地沸ついで鉄

色が黒めとなる。刃文、小沸ついた浅いのたれに互ノ目を交え、肌からんでほつれや砂流しかり、小足入り、総体に沈みこころで棟焼入る。帽子、直ぐ調に先き焼詰めて掃きかける。

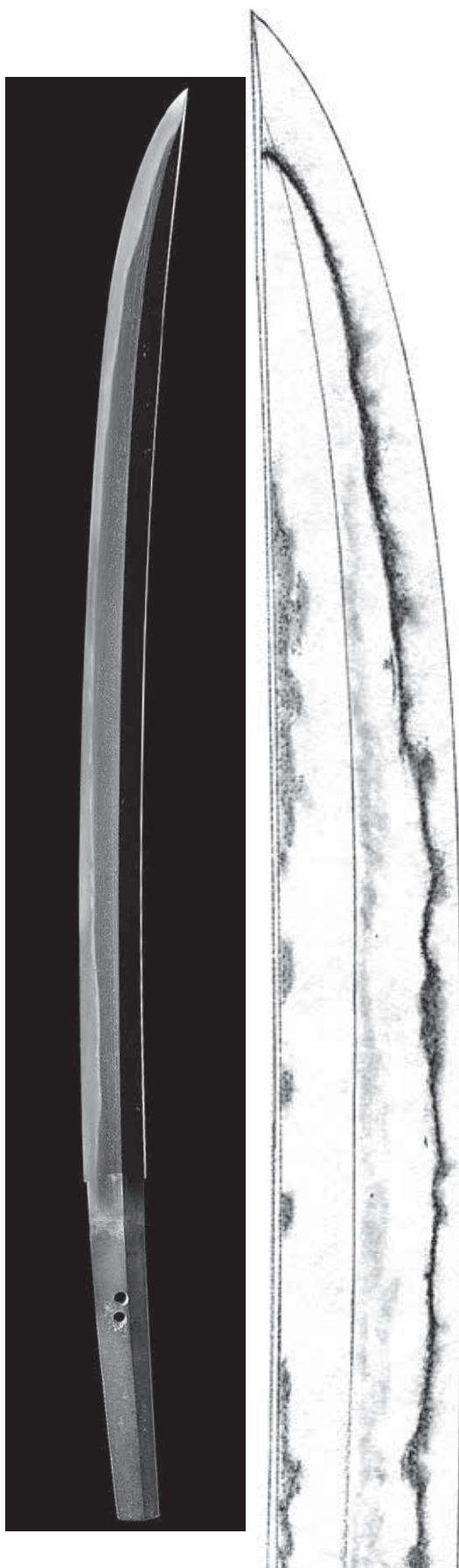
南北朝初期、筑前国には左文字が出現し、それまでの九州物に見られない相州伝を導入し、乱れ主調で地刃の冴える作風を樹立した。一門の刀工たちも師風を受け継いで繁栄し、それらの刀工および作刀

を末左と称している。いずれも南北朝の作で優れた技量を示す。この脇差は薙刀直しの太磨上無銘であるが、いかにも雰囲気のあるもので、拵は感じのよい時代拵で、黒呂鞘に直しは少し見られるが、金具もさまざまにちよつと目立つものを使っている。

素銅一重鍔 拵付（白鞘もあり）

特別保存刀剣鑑定書付 六五(65)万円

全身を除いて原寸



黒呂塗鞘脇差拵（縁頭）桐唐草図 赤銅七々子地 金色絵 金小縁（目貫）布袋図 赤銅地 容彫 金色絵（鐔）無銘・献上 無文 赤銅磨地 丸形（小柄）草鹿図 素銅七々子地 高彫 金色絵 裏・素銅（小尻）無文 鉄鎚目地 金小縁（柄）白鯨着薄緑糸巻（拵の総長 七二cm）



太刀

備州長船住景光^{かげみつ}
元徳三年三月日

(鎌倉末期—備前) 六九四年前

鎬造り 刃長二尺三寸強(69・7cm) 反り八分弱

元巾九分六厘 先巾六分二厘 重ね二分四厘

腰反り深くついた刃長二尺三寸の太刀姿で、やや細身にも見えるが、鎬高く重ね厚く、中切先の締まった体配で重量は十分。地鉄、小板目よく鍛えてつみ、地沸が微塵に細かくついて美しい肌合いとなり、乱れ映りが鮮明にたつ。刃文、物打ち辺はのた

れ調で匂い締まり、中ほどは焼きが高まり小互ノ目、小丁子に尖り調が交じり、小足・葉入り、小沸つき、わずかに湯走り、金筋・砂流しかり明るく冴える。元は低く直ぐ調。帽子、のたれ込み小丸に返る。

景光は長光の子で、光忠—長光と続く長船三代目で、片落ち互ノ目を完成したことも名高い。製作年代は鎌倉後期から南北朝期はじめてまで三十余年にわたる。作風は直刃仕立てに片落ち互ノ目を主調とするものなど、長光よりも穏やかな出来口であるが、鍛えはよく鍛えてつみ、時には父以上に優れたものが見られることが注目される。また短刀の作品が多

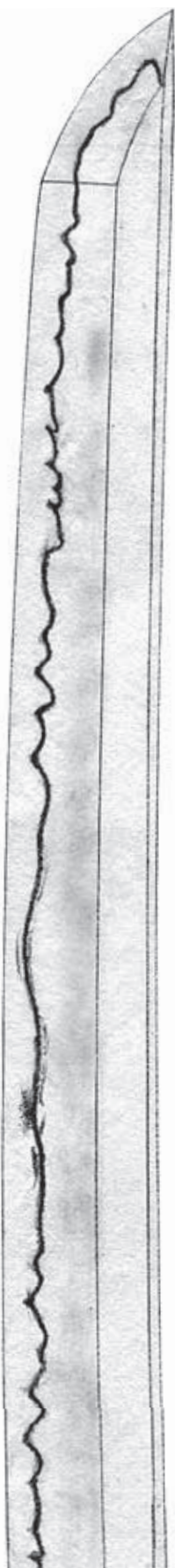
いのも特徴である。この太刀は鎌倉後期の製作当初の太刀姿がよく保たれており、鍛えは景光の真骨頂である美麗な鍛えが一際見事で、冴えた焼刃など出来優れ、加えて数少ない長刀で、在銘年紀作でもある本太刀は、同工を研究する上で資料的価値もさがる高く、新しく重刀に指定された。

重要刀剣(令和5年・第69回)

『刀剣美術』令和6年3月号所載

金着二重鎧 白鞘 二、八〇〇円^(2,800)

全身を除いて原寸



槍 兼元

(天文—美濃) 室町後期 約四九〇年前

平三角直槍 長さ九寸六分弱 (29 cm) 元巾七分
先巾六分四厘 重ね二分二厘 全長57 cm

ケラ首を長く丸く造るといふ古い時代の槍の造り
込みで、槍穂全体の長さは29 cm、刃のあるところは

22 cmと、いずれにせよ長さのあるもので、身巾狭く
スラリとし、重ね厚い。平三角の平地中央に太樋を
掻き中に素剣を浮彫、その下に不動明王の梵字を刻
して美観を添える。地鉄、柃流れて地沸がつき、刃
文は直刃仕立てで小沸がつき、先の方は匂い口が
ふつくとする。帽子、直ぐに丸、掃きかける。
スッキリした兼元二字銘の直槍で、彫りもあつて

入念作、特別保存の鑑定書も付いた。兼元は兼定と
ともに室町後期の美濃鍛冶の代表。同銘が相継ぎ、
中でも有名なのが孫六兼元である。本作の二字銘は、
孫六ではないがほとんど同時期と思われる兼元の作
で、さすが兼元一派の作であるので出来がよく、新
たに研いでまた見栄えが上がつた。

白鞘 特別保存刀剣鑑定書付

三八(38)万円



全身を除いて原寸

脇差

備州長船盛光^{もりみつ}

応永廿八年三月日

(室町初期—備前)

六〇四年前

鵜ノ首造り 刃長一尺五寸三分(46・5cm) 反り二分半 元巾九分三厘 先巾六分八厘 重ね二分一厘 手持ちのよい鵜ノ首造りの脇差で、身巾・重ねとも頃合いに反りは浅め、中程より上は棟鎬高く棟を

卸し、表に腰樋・添樋、裏に腰樋を刻する。地鉄、肌立ちころの板目に空交じり、地沸がつき、淡い乱れ映りたつ。刃文、小沸出来の小乱れにさまざまの刃を交え、砂流しよくかかり、金筋も入る。帽子、乱れ込んで先き尖り調に返る。

室町初頭の応永年間、備前長船には格調の高い作風の刀工が現れ、これらを応永備前と呼んでいる。盛光は康光と並んでその代表である。本作は鵜ノ首造りという盛光には珍しい姿であるが、やはり上手なものである。肌目のたった応永備前の肌に、得意の乱れ刃を焼いて映りもたつ小気味よい作である。

金着二重鑑 白鞘

特別保存刀剣鑑定書付

一二〇(120)万円

全身を除いて原寸



短刀

まさしげ 正重 (千子)

(永正—伊勢)

室町後期 約五一〇年前

平造り 刃長九寸七分(29・3cm) 反り一分弱
元巾八分三厘 先巾六分一厘 重ね一分八厘

平造り長寸の短刀で、身巾狭めに先反りがわずかにつき、重ね薄め。地鉄、大板目風に柃が流れ、大柃目も交え、強く肌立つ。刃文、箱刃がかった互ノ目を連ね、乱れの間はのたれて低く、表裏揃い気味で、小沸よくつき、刃縁に砂流しや金筋かかる。帽子、のたれ込み小丸で掃きかけ、返り長い。



正重は伊勢千子派の優工であるが、村正が有名すぎるため影に隠れてしまっている。正重は村正の子もしくは門弟といわれ、室町後期の永正ころ。室町末までの古刀期に三代続いた。村正との違いは姿にあり、短刀にしては大ぶりの一尺ほどの作が多く、村正は小ぶりなものがほとんど。また本作の中心はタナゴ腹と称し、刃側がクツと括れ中心尻もクツキリ、一度見たら忘れられない。正重にはもう少し穏やかな形の舟底形中心もあるが、それは少し時代が下がる。本作は地刃において、また中心の形からも時代が上がる。拵は中身に比しだいぶ長寸の合口拵。鞘の孔雀石の緑色が映え、金具もそれぞれ佳い画題。

金鍍金一重鍔 拵付(白鞘もあり)

特別保存刀剣鑑定書付 一四〇(140)万円



全身を除いて原寸

緑色孔雀石塗込め鞘合口拵 (縁頭) 宗典と銘あり 園城寺の鐘図 赤銅七々子地 高彫 金色絵 裏・磨地 (柄) 白鯨着黒糸巻 (拵の総長 五四・5cm) (小柄) 無銘 (脇後藤) 玄猪図 赤銅七々子地 高彫 金色絵 裏・磨地 (柄) 白鯨着黒糸巻 (拵の総長 五四・5cm) (拵図は次頁)



短刀

備州長船祐定^{すけさだ}

永正八年二月日

（室町後期—備前） 五一四年前

両刃造り 刃長七寸六分弱（23cm）反りわずか

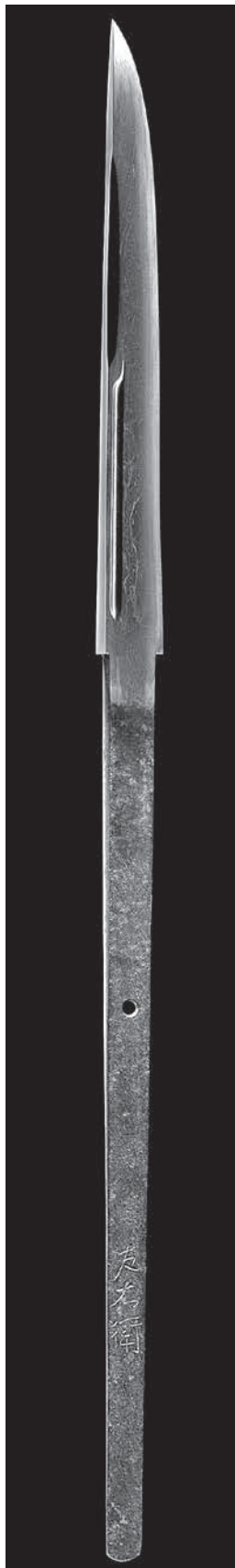
元巾七分五厘 先巾四分八厘 重ね二分四厘

頃合いの引き締まった姿に反りはわずか、中央の鎧筋高く、ふくらの枯れた鋭い造り込み。地鉄、板



目が鍊れ、小奎を交え、地沸よくつく。刃文、小沸出来の互ノ目が丁子を交えて乱れ、足入り、処々砂流しかり、明るく冴える。帽子、乱れ込んで小丸。末備前を代表する祐定には数多くの同銘の鍛冶がいるが、この年紀の永正というときまだ初期であり、祐定中の名工・与三左衛門祐定がまださかんに鍛刀していた頃である。本作に個銘はないが、そのレベルの高い時期の作であるので出来はたいへんによく、姿は室町後期特有の両刃造りで、この期の備前を代表する祐定の典型作である。佐藤寒山博士の鞘書もあつて昔から大事にされてきた品で、拵は反りのないさらっとした感じの黒呂鞘の合口拵。幕末製作時の金具を使つていて雰囲気がい。

銀着一重釦 拵付（白鞘もあり）佐藤寒山鞘書あり
特別保存刀剣鑑定書付 一五〇（150）万円



菊池槍

無銘

末延寿すえんじゆ

(切付銘) 左右衛

(室町後期—肥後) 約四八〇年前

長さ六寸四分(19・3cm) 元巾六分八厘 先巾四分四厘 重ね三分半 なかこの長さ27cm 全長46cm

中心が長い生ぶ姿の菊池槍。穂は重ねのごく厚い

短刀姿に造り、上半の棟を少し削ぎ、下半に薙刀樋を彫り陰影がつく。地鉄、大板目で先の方は証に流れ、肌目が立ち、地沸がつく。刃文、表は小沸づいた直ぐ調にほつれかかり、裏は直刃で刃縁に長い一本の砂流しかかる。帽子、強く掃き掛ける

菊池槍とは肥後の豪族・菊池一族がお抱えの延寿

の刀工に作らせたものという。今に残るのは室町中期以降の無銘のものがほとんどであるが、南朝の忠臣・菊池氏の造らせたものとして昔から一部に根強い人気があり、その傾向は今でも続いている。

素銅一重鐶 白鞘

保存刀剣鑑定書付

二四(24)万円



黒呂塗鞘短刀合口拵

〔目貫〕

石灯籠

(赤銅地)

にカタツムリ

(素銅地)

図 容彫

金色絵

〔貴金Ⅱ栗形兼用〕 唐草金線彫

赤銅磨地

〔角所〕

黒漆塗研出し

〔柄〕 白出鮫

(拵の総長

三六・五cm)

全身を除いて原寸



脇差

大和太掾藤原正則まさのり

(元和―越前)

江戸初期 約四〇五年前

平造り 刃長一尺四寸六分(44・3cm)反り一分五厘
元巾一寸五厘 先巾八分五厘 重ね二分二厘
大ぶりの迫力ある姿の平造り脇差で、反り浅めに
身巾広く重ね厚い。表裏の彫物がよく、表に巖上不

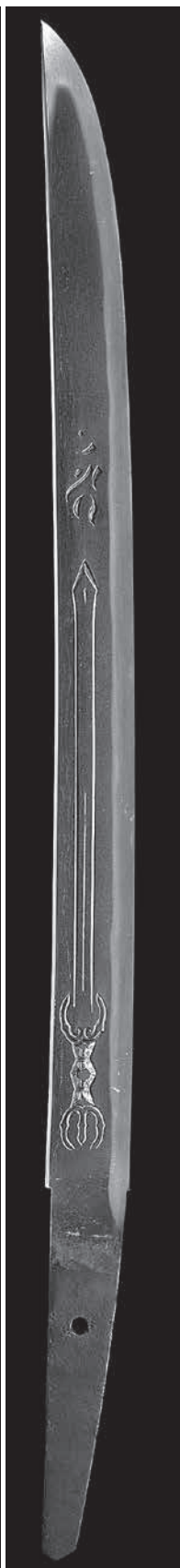
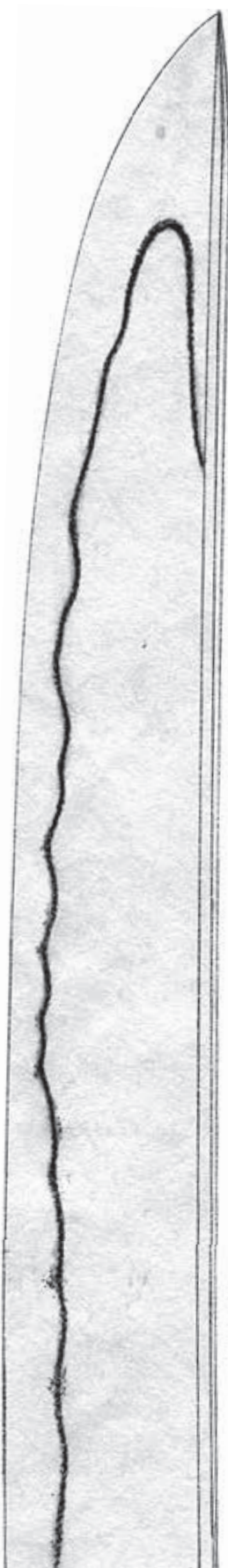
動尊、裏に大きく三鉾付剣と梵字を深い鑿で彫る。
地鉄、板目がつんでやや肌立ち気味、流れも交えて
全体に黒ずんだ肌合いで、地沸こまかにつく。刃文、
焼き巾の広い直ぐ調で、小互ノ目を交えて短い足入
り、砂流しかり、小沸深くつき匂い口沈みごころ。
帽子、直ぐ調に先き小丸で返り長い。

大和太掾正則は山城の三条吉則の末裔と称し、本
国は丹後宮津、のち越前福井に移住した。慶長年間
に結城秀康が福井の城主となったため、その名声を
したって各地から集まった刀工は多く、正則もその
一人であつたろうと思われる。年紀は慶長13年から
ありけつこう古く、初代康継と同じころである。本
作は彫物が入って出来がよく、正則の傑作。

金着二重釦 白鞘

特別保存刀剣鑑定書付

八五(85)万円



全身を除いて原寸

脇差

守勝^{もりかつ} (得次郎^{とくじら})
(寛永—下野^{しもつけ})

江戸初期 約四〇〇年前

鑄造り 刃長一尺八寸九分半 (57・4 cm) 反り五分
元巾九分四厘 先巾六分七厘 重ね二分二厘
頃合いの長さ・身巾・反りの脇差で姿よく、鑄を
少し卸ろす。地鉄、目の大きめの板目に奎が交じり、
きれいに肌が立ち地沸がつく。刃文、焼き高めの丸

い互ノ目が肩を接して頭揃い気味に並び、沸よくつ
き足入り、こまかい砂流しかかる。帽子、直ぐ調で
焼き深め、よく掃きかけて小丸。

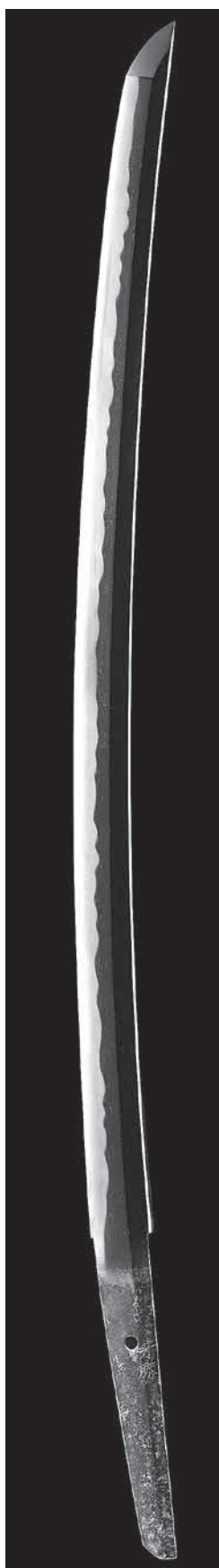
野州^{のう}守勝は全国的には知名度は低いが、栃木県に
おいては人気工である。室町後期から得次郎宿で鍛
刀し、当時の得次郎宿は宇都宮氏の勢力圏で家臣・
新田氏の築いた城があった。江戸時代は日光街道の
中間の宿場・得次郎町として賑わい、得次郎鍛冶も
江戸前期ごろまで続いた。中で守勝は技量よく、徳

次郎正宗と称えられたが、残る作品は少ない。彫物
にたけ剣巻龍・素剣などを施した作品など、末相州
の優品と見違うばかりの作もあり、平成30年には享
祿元年紀の短刀が重刀に指定された。さて本作は作
風からみて新刀期と思われる。銘鑑にも寛永の守勝
が所載されていてこの工と思われる、それはそれで珍
しい。傷欠点なくピンとした出来である。

金着一重鑑 白鞘

特別保存刀剣鑑定書付

八八(88)万円



全身を除いて原寸

大小一組・拵付

〈大小の大〉

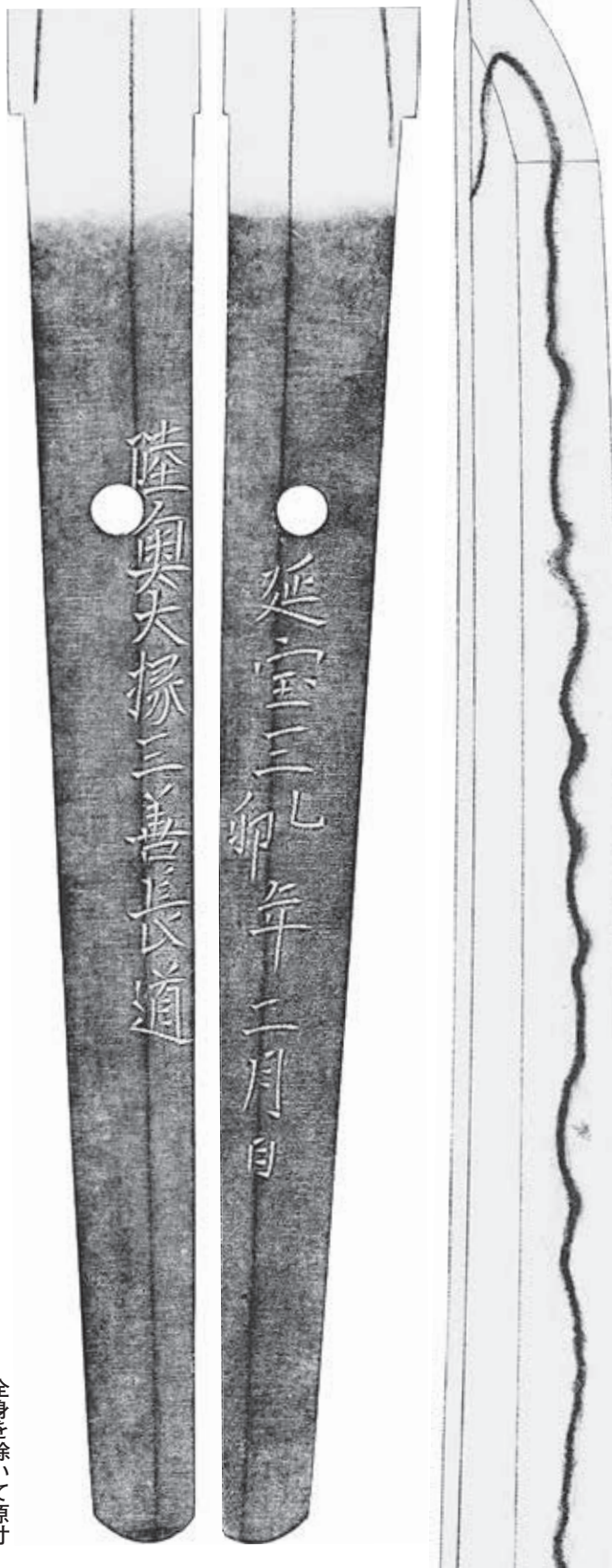
刀 陸奥大掾三善長道 みよしながみち

延宝三乙卯年二月日

(江戸前期・会津) 三五〇年前

鑄造り 刃長二尺三寸五分弱(71・2cm) 反り四分八厘 元巾九分五厘 先巾六分一厘 重ね二分六厘 長さよく、いつもの姿より身巾狭めであるが、その分重ねを特に厚くしており、反り浅めに元先に巾差をつけ、ピンと張った姿で重量がある。地鉄、板目がゆつたりと鍛られて柃ごころが交じり、地沸よく

つく。刃文、互ノ目に小のたれ・小互ノ目を交え、刃縁沸よくつき匂い深めで、わずかに砂流しかかり、足が入る。帽子、直ぐに先き小丸、返り長め。奥州刀工の中で人気抜群の初代・長道の作である。父が伊予松山から移ってきた政長で、長道は寛永十年に会津に生まれた。万治二年に陸奥大掾を受領。



全身を除いて原寸



作風は、のたれに互ノ目が交じり、高低のある乱れ刃が多く、江戸の長曾祿虎徹のハネトラ時代の作柄に近似し、斬れ味にも優れて最上大業物に列せられるところから、一名「会津虎徹」とも呼ばれている。

〈大小の小〉

脇差 包吉かねよし

(寛文―仙台)

江戸前期 約三五〇年前



本作も刃文・帽子ともに虎徹風でいかにも新刀風で感じがよい。また本工に裏年紀のある作は少ない。ガツシリとした大小半太刀拵が付けられており、幕末の制作当時のまま健全に残されていて、当時の気

鎬造り 刃長一尺六寸(48・5cm) 反り三分五厘
元巾一寸 先巾七分 重ね二分強

二寸磨上げて頃合いの長さになった鎬造りの脇差で身巾がある。地鉄、仙台国包伝のこまかい柃目がつんで地沸がつく。刃文、広直刃、刃縁、小沸が縮まり、小足など入り動きがみられる。帽子、

風を知るようでまことに貴重である。

金入り素銅一重鍔 大小拵付(白鞘もあり)

特別保存刀剣鑑定書付

大小で 二七〇(270)万円

直ぐに焼詰め、強く掃きかける。

初代国包は藩命により上洛し、元和五年に修業帰国して御刀鍛冶として登用された。その折り、和州南都文珠派の阿部甚左衛門包吉と同庄司包蔵が、仙台に移住して、国包に入門したと伝えている。

金入り素銅一重鍔 保存刀剣鑑定書付



黒革石目塗鞘大小半太刀拵 (総金具Ⅱ縁頭・鯉口・小尻) 無文 真鍮石目地(目貫) 大・伊勢海老図 素銅地 容彫。小・水鳥に碇図 赤銅地 容彫 金色
絵(鐔) 大・剣と龍を鋤下彫 鉄檜皮文地 隅入り木瓜形 両櫃孔と手貫孔に銀内覆輪。小・無文 鉄地 お多福木瓜形 赤銅覆輪 両櫃孔に四分一内覆輪 筭櫃
孔・真鍮埋め(小の小柄) 無文 銀無垢磨地(栗形) 黄土色水牛製(柄) 白鯨着濃緑糸巻(拵の総長 大一一〇一cm 小六九cm)

脇差 近江大掾藤原忠広 ただひろ

(寛文―肥前)

江戸前期 約三六〇年前

平造り 刃長一尺一寸一分(33・6cm) 反り二分
元巾一寸九厘 先巾八分弱 重ね二分三厘

身巾・重ねのある大ぶりの平造り寸延びで、反りは浅くつく。地鉄、小板目が肌立ちどころにつみ、地景こまかく入り、地沸のつく小糠肌できれいに輝く。刃文、のたれに互ノ目を交えたゆったりとした乱れで、匂い深く沸がよくつき、飛焼を加えて変化もある。帽子、焼き深め、直ぐに尖り気味に小丸。

近江大掾忠広の寸延びである。二代忠広は父・初代忠吉のあとを継ぎ、忠吉家を父以上の隆盛に導き、ひいては一族郎党で作り上げる肥前刀の名を天下に広めた功労者である。忠広はたくさん作品を作ったが平造りの脇差となるとまれである。本作は、姿において数の少ない二代忠広の作品で、刃文はおおらかに乱れ、全体に健全で力があり優品である。幕末の拵が付いており、傷みのないきれいな印籠刻み鞘に、縁頭は出羽庄内の光親(鷲田三代目)の作で珍しく為銘が入っている。

金着一重鍔 拵付(白鞘もあり)

特別保存刀剣鑑定書付 一二五(125)万円



全身を除いて原寸



黒呂印籠刻み鞘脇差拵

(縁頭・小尻) 悠然居光親(花押) 為大瀬正直君(幕末―庄内鶴岡) 松樹に猛禽図 四分一磨地 片切彫 甲鋤彫

(目貫) 葎図 赤銅地 容彫 金・素銅色絵 (鐔) 無銘・献上 無文 赤銅磨地 長丸形 (小柄) 菊にコオロギ図 赤銅磨地 金線布目象嵌

(柄) 白鯨着金茶糸巻(拵の総長 五七cm)



長巻

泰龍齋宗寛造之
たいりゅうさいそうかん

文久二年八月日

(幕末—江戸) 一六三年前

刃長二尺一寸三分 (64・4 cm) 反り三分強 元巾一寸強 先巾一寸三分 重ね二分七厘 総長108・5 cm
全長1mをゆうに超える長巻直しで、元身巾は厚

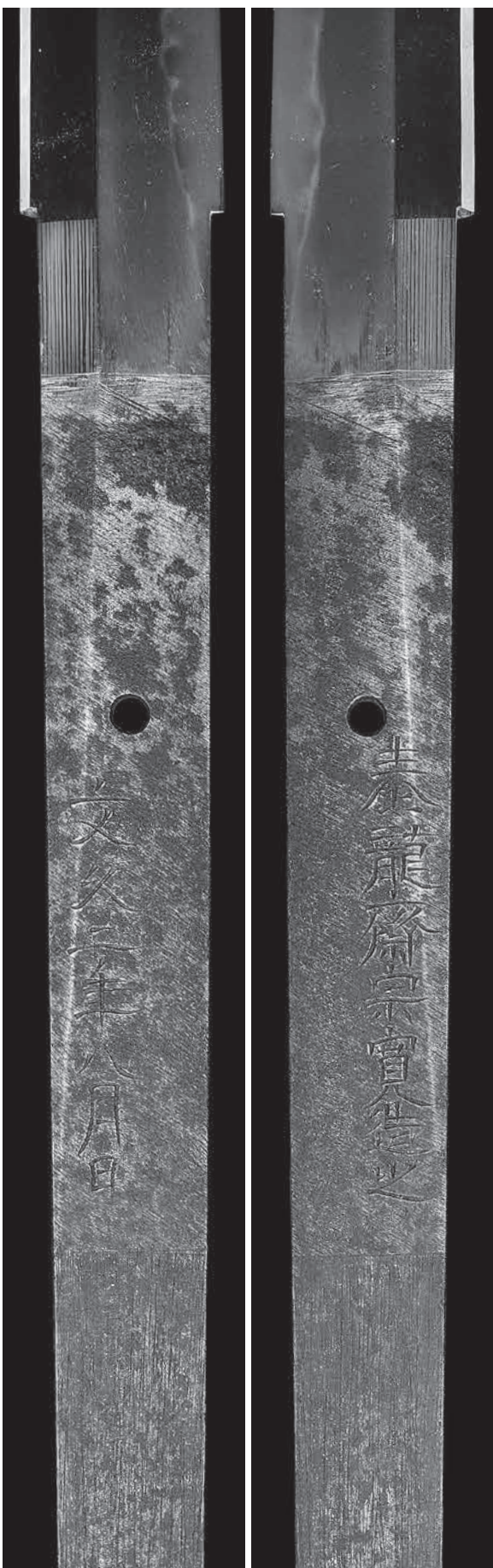
く広く、中ほどからは棟を卸して鎬高く、先は頭を大きく張らせ両刃造りにするという異様で迫力のある姿。地鉄、よく錬れた小板目で無地風となり、地沸こまかに厚くつき、淡い映りどころ立つ。刃文、小沸縮まり気味の丁子刃が頭揃いごろとなり、刃中に足が長くきれいに入る。帽子、乱れ込んで先き小丸調となり、深く焼き下げる。

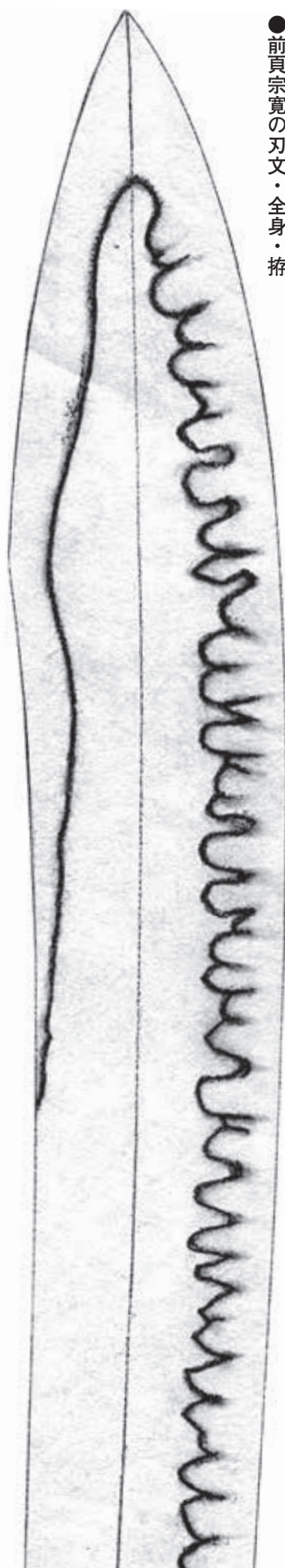
宗寛は新々刀の雄・固山宗次の高弟。推挙で下総古河藩工となる。この一振は珍しい一振で、この姿は初見である。当時の拵がついているのも貴重で、大きな黒塗叩き塗の鞘も立派で柄の赤檜棒も力強い。

素銅一重鍔 拵付(白鞘もあり)

保存刀剣鑑定書付

一七〇(170)万円





黒叩き塗鞘薙刀拵（柄）金具（口がねは素銅の耳刻み鐔形、前後に二枚ずつ切羽がつく。逆輪を欠く。胴がねは鉄錆地）
太刀打ちは朱塗の千段巻き。蕪巻は金塗。棒は赤檜。石突は筒形丸尻の鉄製（拵の総長 二m）

刀 造大慶直胤（花押）

天保七年仲春 由虎好之

（江戸後期—江戸）一八九年前

鑄造り 刃長二尺二寸五分（68・1cm）反り七分強
元巾一寸六厘 先巾七分五厘 重ね二分三厘

太刀造りの新々刀の優刀で、反り深く腰反りつき、身巾広く重ね厚く、中切先が延び、表裏に棒樋を刻して覇気がある。地鉄、柃目肌がよく練れてつみ、

地沸が濃く厚くついて、淡い映りたつ。刃文、物打ちと腰元を沸・匂い深く高く焼き、あいだの中ほどは低めに小沸出来の小互ノ目を並べ、総体にほつれかかり砂流しさかで、刃中に足よく入り金筋・飛焼かかる。帽子、焼き深くのたれ込み、さかに掃きかけて小丸。

直胤は水心子正秀の門人で、備前伝・相州伝ほか各伝をこなし、技量的にも師を凌駕するほどで、正秀同様に新々刀最上作に位置している。本作は58歳

円熟期の時で直胤最盛期。この頃は柃鍛えに相州伝の作が多い。迫力ある姿に、中心の立派な銘と花押、直胤の魅力にあふれ、また為銘が貴重。由虎とは伊能宗右衛門一雲のこと。江戸後期の槍術家で宝蔵院流の達人。上総国・貝淵藩で槍術指南を勤め門人に藤田東湖など。また神谷潤亭より節切尺八の普及につとめた。本作の刃文も由虎の好みか。

金着一重鑑 白鞘 『日本刀随感』所載

『首切り浅右衛門押形(下)』所載

特別保存刀剣鑑定書付

三四〇(340)万円



刀 源正雄 まさお

文久三年三月日

(幕末—江戸) 一六二年前

鑄造り 刃長二尺五寸四分 (76・9 cm) 反り七分
元巾一寸一分四厘 先巾七分九厘 重ね二分五厘
ごく身巾広く、元先の巾差ややついて反り深く、
中切先が延び、鑄高めに重ね厚く重量のある堂々と

した姿。地鉄、小板目に柃目が沈み込むように交
じってつみ、地沸厚くついて地景入る。刃文、小沸
縮まり気味の大小の互ノ目が連なり、足がよく入る
帽子、焼き深く一枚風、尖って返る。

人気の清磨一門の優刀である。鈴木源正雄は美濃
の出身で、江戸に出て清磨の門に入る。何人かいる
門下生にあつて先輩格にあたり、同門の栗原信秀や
清人がのちに清磨伝の他に自分の個性ある作品を発

表したのに対し、正雄は終始清磨風である。銘は草
書にきりまことに上手である。安政五年から万延元
年の三年間は箱館に渡つて鍛刀し、のち江戸に戻る。
本作はその一振で、長さあつて豪快、刃区はまちを見ても
生ぶ刃の残る健全さで一回しか研いでないのではな
いか。中心なかこもきれいで正雄の代表作である。

特別保存刀剣鑑定書付

金着二重鍔 白鞘 四〇〇(400)万円



刀

城慶子正明鍛之試鹿角及甲札与棒
慶応四戊辰年春二月

(幕末—江戸) 一五七年前

鑄造り 刃長二尺三寸(69・6cm) 反り六分 元巾一寸六厘 先巾七分五厘 重ね二分六厘

表裏の彫物が見る人を驚かす力強い一振。長さ程よく身巾広め、反りついて中切先に重ね厚い。太刀表の腰の櫃内に滝不動尊を浮彫、その上は棒樋に添

樋、裏は鑿深い剣呑み龍と二筋樋を彫る。地鉄、小板目がよくつみ、地沸こまかにつく。刃文は広直刃、刃縁に小沸つく。帽子、直ぐに大丸風。

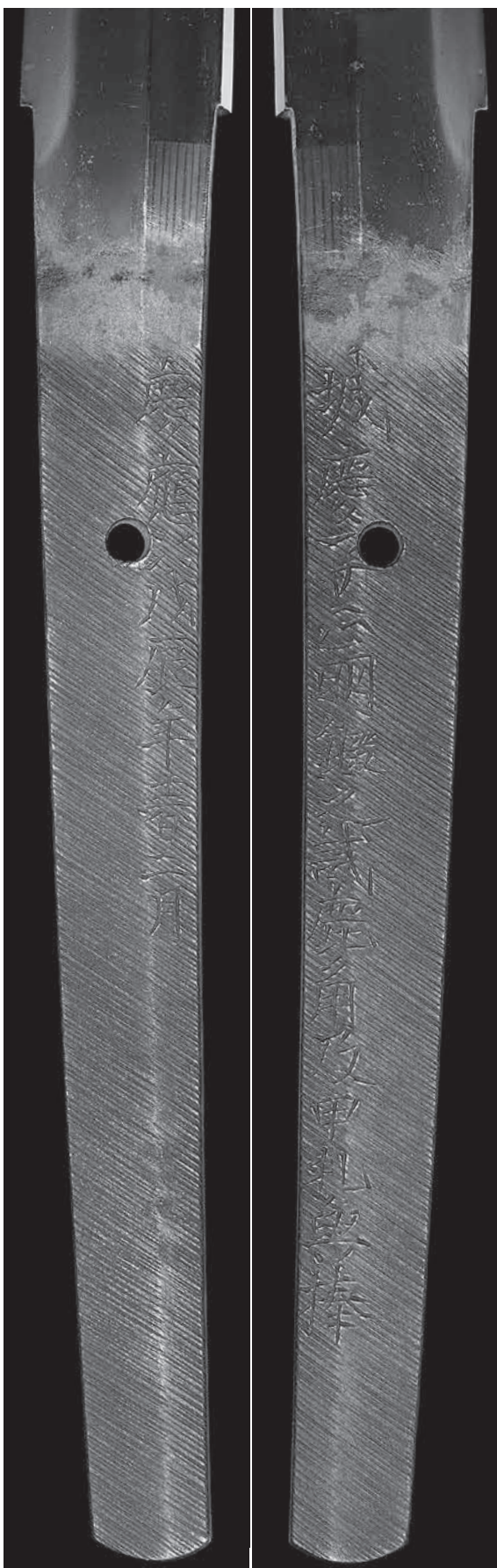
城慶子正明、会心の一振。正明は新々刀の雄・細川正義の高弟で、師と同じく作州津山の藩工となる。作風は備前伝・相州伝とも正義によく似て上手であり、正義亡きあとは細川一門の代表格として明治四年まで活躍した。本作は彫りが豪快。彫物は価格が高く、表を濃くしても裏はあつまり彫るのがほとんど

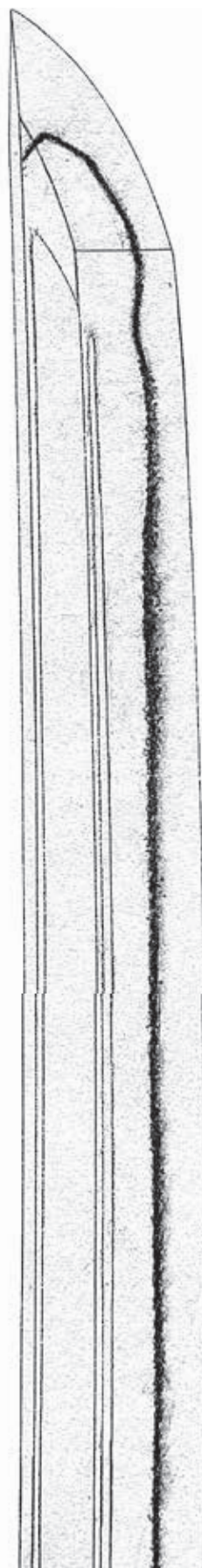
どであるが本作は表裏ともクツキリと大きい。試し銘も城慶子の十八番で「やったー」という感じである。また今の私たちには戊辰の年季も感慨深い。拵は華やかで、朱塗鞘に金茶柄糸、金具も縁頭金線象嵌が目立ち、中身の刀に合う。刀がガツシリしているため鞘口・小尻周辺にもう一巻きしている。

金着一重鋤 拵付(白鞘もあり)
特別保存刀剣鑑定書付
二三〇(230)万円



全身を除いて原寸





朱塗鞘打刀拵

〔縁頭〕唐草図 赤銅七々子地 金線象嵌 金小縁 〔目貫〕違い鷹羽紋図 四分一七々子地 容彫 〔鐔〕忍ぶ草図 鉄流し地 丸形 金布目象嵌 小肉耳 〔鯉口・栗形・小尻〕唐草図 素銅磨地 毛彫 〔柄〕白鯨着金茶糸巻 〔拵の総長 九九・五cm〕

全身を除いて原寸

刀 相州住和平作

昭和甲寅年初冬吉日 (昭和49年)

(現代―神奈川県) 五十年前

鑄造り 刃長 尺四寸一分 (72・8 cm) 反り 八分強 元巾 一寸二分 先巾 八分 重 二七七厘

長さ長く、身巾広く重ね厚く、先反り風に反り深く、切先の延びた力強い姿に表裏に棒樋を掻き流す。地鉄、板目肌つみ、流れが刃寄りに強く現れ、地沸厚くついで地景入る。刃文、小沸深いのたれ仕立てに互ノ目乱れを連ね、物打ち刃は一段と高く焼き、大小の互ノ

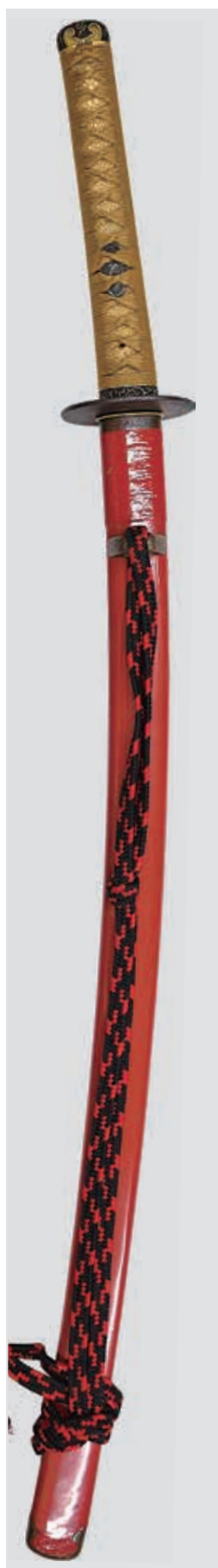
目を競うように配し、刃中足よく入り、こまかな砂流しよくかかる。帽子、乱れ込み、先き小丸で掃きかける。和平師は昭和18年の生まれで宮内昭平二門。その二門の河内国平師にこの刀を見てもらった。

「これは和平さんの傑作。(昭和49年作で) 独立間もない時は相州伝を師伝でやっていた。のちに備前伝に変わる。私が隅谷先生に入門して備前伝を習ったけど、和平もそれを教えてくれといって、教えた。彼の備前伝は私から伝わったものでまちがいない。その後、大病してな」

東京に行くとき藤沢の家(遊行寺のそば)によく行って話をした。まじめな人で、かわいい顔していた(童顔)。

ただ、もう体が悪かった。作品はしっかりしたものばかりだった。研ぎも斎藤司にたのんでいたから、今回の作もそうかも。金はかかっているのだ。

ともかく、高校(日大藤沢高校)の時優秀で生徒会会長にまでなった。その切取りを持って、夏休みに家を出てきて、千曲川を上り、坂城にきて、橋のたもとで寝て、親方の所に行った。入門は許されて住み着き、親にも連絡した。そしたら親が探しにきた。親方が「俺に任せろ!」と言ってくれ、ありがたかった。言ってくれた師匠には感謝している。親は帰った。ところが、それから親方は大病をして、一年、教われなかった。兄弟子の次平さんに習った。



和平さんは五年いた。私は彼と一年から一年半ほど一緒にいた。親方が一番苦しかったときの弟子だったので苦労したはず。寒くしもやけで足指が崩れた。手は傷だらけ、職人の手だった。その後の弟子は、親方も病気は治り、人間国宝にもなつてな、認められたから楽だった。宮入さんの二門は次平さんと和平さんが築いた。次平はきびしいが、細かく全部教えた。和平は賢くきち

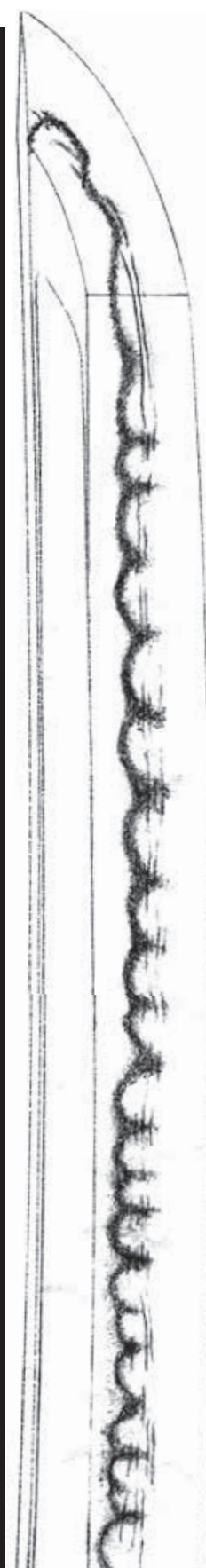
んとして頑張った。それを後の者に伝えた。宮入は21人弟子を取り、6人無鑑査になった。一番率が高い。それは程度のよい、いい仕事をさせたから。それは次平と和平のおかげ……」国平師の話は続くがスペースでこま

で。
一般的な解説を続けると、平成に入ると和平師は備前伝を焼き、同10年ころは連続して特賞を受賞した。

宮入門にあつて、後輩の何人かが先行する中、遅咲きの大輪を咲かせるような勢いに、皆がびつくりして大いに期待したものであるが、平成15年2月に鍛刀所の藤沢で59歳没。「かねて病氣療養中のところ……」というお手紙をいただいたことを、今になって思い出す。

特別保存刀剣鑑定書付

金着二重鍔 白鞘 九五(95)万円





鐺 信家のぶいえ

竹図 鉄鎚目地 長丸形 毛彫 丸耳 両櫃孔埋め

紫黑色を帯びた鉄地に、太めの毛彫で竹の幹と葉を彫る。一見、単純な図柄の板鐺だが、優れた地鉄を鎚目に仕立て、耳には鉄骨がわずかながら現れており、武具でありながら品格と雅味を備えている。切羽台から耳際にかけてゆるやかに高くなる中低の肉取りは信家鐺の特色でもあり、実用的で巧妙である。なお、この鐺の銘は太字で初期作と思われる。

信家は金山・尾張透し・山吉・法安などの安土桃山時代の尾張鐺に、作域として似かよったところも多いが、戦国時代の武將の心意気を表現したその豪快で力強い作風と、造形ならびに地がねの鍛えよさは他の作品に紛れることはない。伏見の金家とともに、鉄鐺の最高峰と絶賛される信家の鐺である。桃山時代。

◆縦七五・四mm 横七〇・八mm 厚さ四・一mm

特別保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 一八〇(180)万円



鐺 無銘 赤坂

三匹鈴虫透し図 鉄磨地 長丸形 透し彫 丸耳

錆色良好な厚手の鉄磨地に、三匹の鈴虫を透し彫する。三匹の鈴虫は、それぞれ特徴をとらえて体の形を変えて配置よくおき、その細く長い触覚と脚を繋いで透かし模様とする。

赤坂鐺は京透しの優美さと、尾張鐺の力強さを合わせ持つ。繋ぎの線は細いが力強く、絵柄が斬新で意匠に優れる。本作は、丸形に丸耳、櫃孔の左右を意識的に歪めるなど、赤坂鐺の特徴を余すところなく捉えており、鈴虫透しは赤坂でも特に高い人気がある。江戸中期。

◆縦七六・五mm 横七四mm 厚さ四・九mm

特別保存刀装具鑑定書付

佐藤寒山博士箱書あり

上製落し箱入り 二〇(20)万円



小柄 宗珉 (花押)

虎溪三笑図 四分一磨地 片切彫 毛彫 裏・赤銅削継ぎ金

落ち着いた四分一磨地に片切彫で談笑する三人の人物を描く。三人は晋の僧・慧遠、詩人の陶淵明、宋の道士・陆修静。慧遠は廬山の寺に籠り、廬山の溪谷・虎溪を決して渡るまいと誓ったが、来訪した二人を見送った際に、話しに興じて、つい虎溪の橋を渡ってしまい、三人で大笑いしたという故事を題材にする。それぞれの輪郭を片切彫でデッサンのように的確に彫り、顔の表情など細部を毛彫する。

宗珉は横谷氏。初代・宗与の子で寛文十年江戸の生まれ。父没後、元禄三年21歳で家督を継ぎ、元禄七〜八年頃に宗珉と改名する。後藤系の幕府抱え工であったが扶持を辞して町彫工となり、家彫の工法を基本に精巧な鑿法で横谷彫を大成する。画題・技法ともに自由でありながら格調高い。また片切彫を開発する。町彫金工の元祖として金工界に君臨し、多くの有力な門人を育成する。俳句、遊芸の嗜みあり一流の文化人であった。享保18年64歳没。

清らかな空気の中、屈託ない笑い声が聞こえそうな小柄で、表を四分一に裏は赤銅、それも金削継ぎにして豪華さを出すなど、さすが手の込んだ名工の作である。江戸中期。

保存刀装具鑑定書付 (昭和61年)

上製落し箱入り 九五(95)万円



拡大



鐔 無銘 京透し

八橋透し図 鉄磨地 丸形 透し彫 角耳小肉

厚手の鍛え良好な鉄地に『伊勢物語』在原業平の東下り「三河の国 八橋」の場面を題材にする。

この八つの橋でつなぐ地は杜若の名所でもあり、業平が「かきつはた」を折句にして詠んだ和歌「からころも きつつなれにしつましあれば はるはる きぬる たひをそおもふ」で知られる。

赤坂・尾張とならぶ三大透し鐔の一つ「京透し」

は、室町中期の京の足利八代將軍義政の好みにより作られたといわれる。優雅で繊細な透しが特徴だが、本作は厚手で、繋ぎには力強さも感じられ、図柄よく優品の一枚である。室町後期。

◆縦八〇・一mm 横七九・四mm 厚さ五mm

特別保存刀装具鑑定書付

上製箱入り 二五(25)万円



鐔 予州住 正阿弥家武

牡丹透し図 鉄磨地 長丸形 肉彫透し

錆色のよい硬質な鉄地に、牡丹花をくつきりと肉彫透しする大ぶりの鐔。花卉は毛彫で花脈を彫り、葉は輪郭を残して鋳彫し立体感を出す。

家武は伊予国（愛媛県）松山の、予州正阿弥派の第一期全盛期・元禄ころの工の一人で、この派の特徴である素朴ながら図案に優れ、肉彫透し・高彫・毛彫・象嵌など広範な作風である。また長州・因州などの山陽道各国との共通点も見受けられる。この鐔は長州鐔風であるが、実に力強く、きりりとして華があり、古くから各書に所載である。江戸中期。◆縦八四mm 横八一・八mm 厚さ四・七mm

『刀装小道具講座七』『刀装小道具銘字大系』『鐔大鑑』所載 保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 二七(27)万円

鐔 八坂永閑

左右松透し唐草図 鉄地 丸碁石形 金布目象嵌 耳・赤銅覆輪 両櫃孔・金内覆輪

時代感のある鉄地に、両櫃孔を松に形どり、縁に金内覆輪をする。また全面に蔓唐草文を金布目象嵌で散らし、腕抜き孔のぐりりにも金を加え、耳には赤銅縄目覆輪を施し、華やかな意匠に仕上げる。

八坂永閑は豊後国（大分県）杵築の工。杵築は杵築藩松平氏三万二千石の城下町として栄え、廃藩置県まで国東半島の政治経済の中心であった。今も残る城下の石畳や待屋敷の規模は大きく往時の面影を見事に伝えている。永閑は街を流れる八坂川の名をとって銘にした。本作は肥後風の作柄であるが、杵



築が海を介しての交通事情を優先していたため、海の向かい側の伊予国の伊予正阿弥の作柄や後代理忠を混合したような手巧のものが見られる。本作は各処に金が入り永閑の入念作である。江戸中期。

◆縦七六・八mm 横七四・七mm 厚さ四・二mm 保存刀装具鑑定書付 十二(12)万円

鐺
無銘
古正阿弥



川筏に小禽図 鉄鍍目地 刳込
み木瓜形 赤銅据文 金・銀・
銅色絵 耳・打返し 両櫃孔・
赤銅埋め

太刀鐺を想わせる刳込み木瓜
形に鉄鍍目地は、古調な雰囲気
を漂わせる。全体に薄手の造り
込みであるが耳を高く折返し、
また大ぶりであるため実に力強
い。表は、大きな荷物と瓢箪を
乗せて川を下る筏と筏師を赤銅
据文し、金・銀・銅色絵。水流
に渦巻を観世文形に高彫し金象
嵌する。裏は一転、水流を銀象
嵌とし、空に二羽の鳥を赤銅据
文してその姿はユニーク。水辺
の水葵・芦に金色絵。

古正阿弥とは室町・桃山時代
の正阿弥派の鐺工によって作ら
れた鐺を指す。京都を中心に
「阿弥」の芸を基とするので、
東山文化の幽玄・閑寂の思想と
洗練された強健さを兼ね備え、
華麗さと無常感の相反する傾向
が一体となる当時の貴族趣味を
持ち合わせる。本作にもそれが
よく表れており、保存状態もよ
く、名品の一枚といえる。桃山
時代。

◆縦八七・七mm 横八六・五mm
厚さ二・七mm

特別保存刀装具鑑定書付
二四(24)万円

鐺
山城国住人
埋忠重成



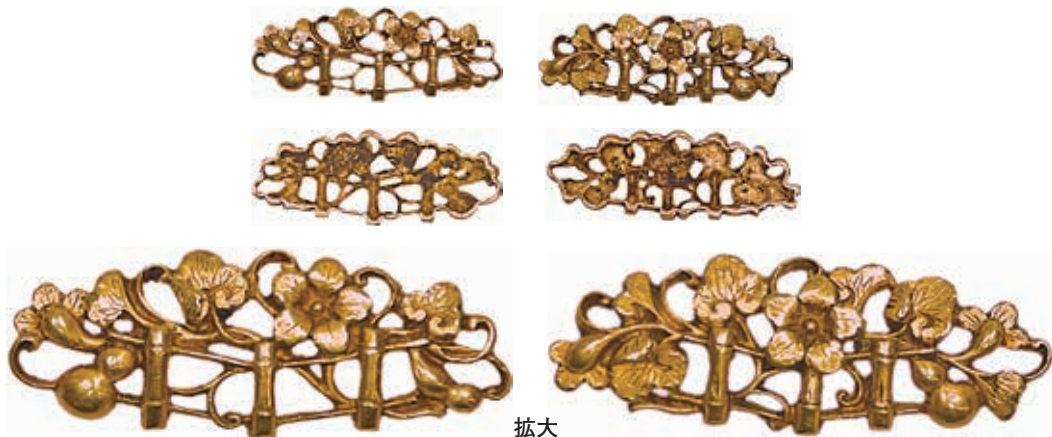
龍図 赤銅磨地 変り長丸形 金・銀・素銅平象嵌 片切彫 丸耳

黒く落ち着いた赤銅磨地に、龍図をアブストラクティックに金・銀・素
銅を駆使して平象嵌する。表の金をまとった龍は身を赤みがかった銀
平象嵌とし、尾が上方に上がり、その銀平象嵌が続く。裏は龍を簡略
化してほとんど素銅の線象嵌とし、上の雲の方を素銅象嵌してくっき
り大きく描き輪郭を片切彫する。表裏とも人を食ったようなユーモラ
スな意匠で、こういう文化が当時の京都にはあったのであろう。

埋忠重成は橘七左衛門という。京都から幕府御用で出府し、江戸・
芝に住む。本作は小品であるが片方の耳を少し削った形がなんともい
えず、地ガネよく、図案は現代にも通じるモダンさで、手のひらに納
めて愛玩するに究竟の優品である。江戸中期。

◆縦六〇・四mm 横五四・四mm 厚さ三・二mm

特別保存刀装具鑑定書付 上製箱入り
旧箱に佐藤寒山箱書あり 二五(25)万円



拡大

目貫 無銘 古美濃^{こみの}

蔓瓢透し図 金無垢地 容彫 透し彫

きれいな金無垢地に、竹垣にからんだ雅趣ある蔓瓢箪を容彫する。瓢箪の可憐な花と真ん中がくびれた実をくつきりと深彫し、葉や花には脈を毛彫する。また竹垣に絡む蔓の動きを繊細に透す。

古美濃とは、室町時代から桃山時代にかけて美濃国に住した金工が独特の技法によって確立した彫物を指す。美濃彫は「美濃の深彫」といわれるように図柄を高彫でスッキリと彫り、彫りの深さと線の強さが際立つ。また同時代の後藤家とは異なり、自由で瀟洒な趣がある。裏から見る抜け穴もまことに味わい深い。上品で雅趣ある目貫で、さすが重要小道具指定の品である。室町時代。

重要小道具(昭和46年・第20回)
上製落し箱入り
九五(95)万円



拡大

小柄 〈棟銘〉後藤法橋

〈戸尻銘〉一乗^{いちじょう}(花押)

流水につくばね草図 赤銅細石目地 金・素銅色絵 銀平象嵌 裏・四分一磨地に毛彫 小口・戸尻に金 漆黒の赤銅磨地にも見える細石目地につくばね草(正月の追い羽根の羽に似ることから)を高彫し、蓐を金色絵、実を素銅色絵し、流水を銀平象嵌する。裏は四分一磨地に蹴彫と毛彫を駆使して、琵琶湖周辺の景色であるうか比良の山々と栗津原の松林を彫り、湖面を線彫し、光が反射するかのように金砂子象嵌を撒く。

一乗は寛政三年に京都で生まれた。後藤本家ではなかったものの、やや力の衰えた幕末の後藤家の中にあって非凡の努力を重ね、一乗細工所も経営し、後藤家の掉尾を飾る名工となり、本邦彫金界に大きく名を留めている。優れた弟子も一琴・一至はか多くを養成した。余技として絵画・俳諧・和歌にも優れ、当時一流の文化人であった。故に作風も多様で一樣ではないが、皆、相当の水準の優れたものである。明治に入っても活躍し、明治九年86歳没。本作は幕末の京の雰囲気を表した優作。幕末。

特別保存刀装具鑑定書付
上製落し箱入り 一〇〇(100)万円



銘拓大

小柄 浜野直随 (花押) 〈棟銘〉

帆掛け人物図 赤銅磨地 高彫 四分
一据文 金・素銅色絵 毛彫 裏・四分一磨地に毛彫

漆黒の赤銅地に、この図は縦図で高い帆柱と水夫を高彫する。帆柱は四分一据文、先端の蟬と呼ばれる滑車の部分と水夫の顔・手足を素銅にする。帆柱の木端巻きと、蟬から出て帆を吊る縄を金色絵、下方は波浪を毛彫。裏は細かい毛彫で船着き場を彫っており、まるで細野惣左衛門である。

直随は遠山氏。はじめ柳川直政の門人・中村直矩に学び、後に初代・浜野矩随に師事し、浜野の流名を名乗る。20歳の時に浅草で独立開業。その後、甲府、越後に赴き、後年は信濃国に移り、74歳で没するまで伊那谷の片桐村で暮らす。江戸で岩間政盛、甲府で浜野直親、越後で小栗良直などを養成する。本作は変わった図柄で人目を驚かせる。裏を見て、その取り合せに納得する小柄で、直随とはやはり異能の工である。江戸後期。

保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 二五(25)万円



小柄 行年六十一歳 如竹叟

月に時鳥図 銀磨地 四分一据文 目に金点色絵 赤銅平象嵌 裏・銀磨地

きれいに光る銀地に、時鳥を四分一で高彫据文し、その下の横縞と月の周囲に棚引く雲を、墨絵式平象嵌と呼ばれる技法で赤銅を嵌入する。時鳥は古来、月とともに多くの和歌に詠まれ、鶯とともにその年の初めての鳴き声「初音」は珍重された。裏は銀地に大きく流麗な銘で、立派である。

如竹は村上氏。江戸中期後半の工で、師伝は不明であるが鐙の象嵌工の出身といわれる。トンボ・蝶・魚などの主題を大きく高彫にし、そこに各種の色がねの象嵌色絵や螺鈿・珊瑚などを嵌め、印象に残る作品を製作した。また一方では、本作のように墨象嵌や緻密な線象嵌など平象嵌の名人でもあり、この手法による作品も比較の数がある。本作は光輝く銀地であるが、磨地は傷みやすく、擦れがある程度見られる。しかし一級の名工の作はなかなか出ないのでお勧めである。江戸芝新門前町住。江戸中期。

特別保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 四〇(40)万円



小柄 光興 (印銘) (鼎印)

鶴図 赤銅細石目地 高彫 金・銀・素銅色絵 毛彫 裏・鉄地

赤銅地を細石目に仕立て、縦図に一羽の丹頂鶴を大きく高彫する。翼は銀色絵し、深い毛彫と細い線で丁寧に羽毛を彫る。長い首と風切り羽は赤銅とし、頭頂の赤く裸出した皮膚は素銅、長い脚と蹄は金色絵する。裏はなんと鉄板にし、そこにいつもの鼎印と光興との印銘を彫る。

大月派はもともと京都金工では老舗的な存在の名門で、特に京都三傑の一人といわれた大月光興が出てからは、その門人子弟に優工が集まり、以後明治の世になるまで大いに発展し繁栄した。光興は明和三年生まれ。才人であり、絵を岸駒に学び、円山派の長沢蘆雪とも親交があったという。作域はまさに絵風であり、彫法は高彫色絵・片切彫平象嵌と共に巧みである。天保五年69歳没。銘は印銘に鼎印を用いて独特である。江戸後期。

特別保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 六五(65)万円





1階の内部



地下の展示室



すずらん通りから見た新店舗1階の外観

移転しています。 新店オープン！

3軒となりに引越しました。
旧ビル建替えのため10m先の(1階・地階)
に新装開店しています。
新しい店は気持ちよいです。即売会にお
越してください。

〒104-0061

東京都中央区銀座5-6-9(1階と地下)
(旧店の5-6-8の最後の「8」が「9」になりました。)

銀座刀剣柴田

電話 03 (3573) 2801・Fax 03 (3573) 2804



鐔 茂包

柳樹二匹馬図 鉄磨地 長丸形 鋤出彫 金・銀象
嵌色絵 鋤残し耳 両櫃孔・金埋め

大ぶりの鐔で、すっきりとした錆色の鉄磨地に、柳
樹と二頭の馬を鋤出彫し、柳の葉や下草を華やかに
金色絵する。馬のたてがみと背景の水辺には、毛彫
を加えて丁寧な描き、流れる水流を銀色絵する。

馬と柳の組み合わせは中国・日本の絵画によく見
られる。旅立つ際に中国では柳の枝を「邪気払い」
「旅の安全」と願って渡したようだ。また馬の鼻を
旅立つ人の向かう方向に向けた。これが「鼻向け↓
銭」となる。本作は馬の姿がよく、また生命力の強
い柳に春の息吹を感じさせるきれいな鐔。茂包は伯
耆国(鳥取県)の工で安田氏、江戸にも住む。伯州

住安田才兵衛茂苞作と銘を切る作がある。江戸中期。

◆縦八五mm 横七八mm 厚さ四・五mm

保存刀装具鑑定書付

上製箱入り 二〇(20)万円